

富士山の描写にみる『更級日記』と『蜻蛉日記』のつながり

〈静岡県富士山世界遺産センター 学芸課 准教授 青木 慎一〉

前回担当した富士山世界遺産コラム vol.48 では、『更級日記』における富士山の描写について取り上げました。『更級日記』は菅原孝標女^{すがわらのたかすえのむすめ}によって書かれ、彼女が 13 歳で帰京する旅路の中で富士山が取り上げられました。今回のコラムとも関わる記述のため、以下に引用します。

富士の山はこの国なり。わが生ひ出でし国にては西面^{にしおもて}に見えし山なり。その山のさま、いと世に見えぬさまなり。さまことなる山の姿の、紺青を塗りたるやうなるに、雪の消ゆる世もなくつもりたれば、色濃き衣に、白き^{あこめ}相着たらむように見えて、山のいただきのすこし^{たひ}平らぎたるより、煙は立ち上る。夕暮は火の燃えたつも見ゆ。

(訳: 富士山はこの駿河の国にある。私の育った上総の国からは西の方角に見えた山である。その山の姿は、まことに世にも類のない形である。一風変ったなだらかな山容が、まるで紺青を塗ったようにそびえているところに、雪が消えるときもなく積っているので、濃い紫の衣の上に白い相を着ているように見えて、山の頂上の少し平らになっているあたりから煙が立ちのぼっている。夕暮ともなると、火の燃え立つのも見える。)

菅原孝標女は富士山の山肌について「紺青を塗りたるやう」と記しました。「紺青」は天然の鉱石から採れる鮮やかな青色の顔料で、異国の情緒漂う高価な輸入品であったことを和田律子氏が指摘しています(和田律子「上洛の記(その二) 富士山—あこがれとおそれと—」(『藤原頼通との文化世界と更級日記』新典社、2008 年))。京都で目にする山とはまるで異なる富士山を、別世界を^{ほうふつ}髣髴させる舶来品^{はくらいひん}を用いて表したと考えられますが、「紺青」という言葉の使われ方を踏まえると、『蜻蛉日記^{かげろうにっき}』とのつながりも見えてきます。

『蜻蛉日記』は『更級日記』と同じく、平安時代に書かれた日記文学です。作者は^{ふじわらのみちつなのはは}藤原道綱母、大河ドラマの「光る君へ」で財前直見氏が演じた人物と言え、イメージしやすくなるでしょうか。『蜻蛉日記』には「紺青」という言葉が次のように出てきます。

九月のつごもり、いとあはれなる空の気色なり。(略)遠山をながめやれば、紺青を塗りたるとかやいふやうにて、「霰^{あられ}降るらし」とも見えたり。

(訳: 九月の末ごろ、まことにしみじみとした空模様である。(略)遠くの山を眺めると、紺青を塗ったとでもいうふうで、「み山には霰降るらし」といった感じで色づいている。)

現代語訳を付したように、遠くの山を見て「紺青」を塗ったとか言うように表現しており、山の描写に「紺青」の語を用いているのです。ちなみに、「霰降るらし」は『古今和歌集』に収められた和歌「み山には霰降るらし外山なる真拆の葛色づきにけり」の一節に拠ります。平安時代に成立した作品で「紺青」の語が用いられた例を調べると、『更級日記』や『蜻蛉日記』の他に『竹取物語』や『うつほ物語』などの物語文学が該当します。ただ、『竹取物語』は^{ひねずみ}火鼠の皮衣、^{かわぎぬ}『うつほ物語』は菊の造花の描写というように、山の描写に用いられた例は確認できません。このことだけをもって



『更級日記』と『蜻蛉日記』の描写を結び付けることは早計ですが、菅原孝標女の血縁や平安朝文学の文章の特徴なども考え合わせると、両作品のつながりが見えてきます。

菅原孝標女の母は藤原倫寧女で、藤原道綱母も倫寧の娘であり、二人は姉妹の関係です。^{ふじわらのともやすのむすめ}従って、孝標女にとって道綱母は母方の伯母に当たります。ただ、姉妹とはいえ、40歳以上年齢が離れているため、孝標女の出生時に道綱母は亡くなっており、直接の交流はありませんでした。また、孝標女には継母もあり、継母の縁者をたどると紫式部や大式三位^{だいにのさんみ}につながります。そして、菅原孝標女はその姓が示す通り、菅原道真を先祖とする文学に長じた家の娘でした。『更級日記』には『源氏物語』を読みたいという強い願望や入手して読みふける喜び、『源氏物語』の登場人物である夕顔や浮舟といった女君への憧れも記されます。平安時代の文学作品は先行する作品のストーリーや人物像、表現などを意識的に作中に取り入れる傾向にあり、『更級日記』にも『古今和歌集』の句や『源氏物語』の一節などが引用されています。「紺青」という言葉の一致だけでなく、血縁や平安朝文学の特徴なども考慮すると、『蜻蛉日記』を踏まえて「紺青」の語を用いた可能性が浮かんでくるのではないのでしょうか。もちろん『蜻蛉日記』とのつながりは誰もが読んで分かるほど明確ではなく、一部の人が気付くようなものだったと推測されますが、富士山に着目して平安時代の物語や日記を読み解いてみると、当時の作家たちの文化的交流の広がりも見えてくるのです。

※『更級日記』・『蜻蛉日記』・『古今和歌集』の本文や現代語訳は、新編日本古典文学全集(小学館)を引用しました。



静岡県富士山世界遺産センター